

「継承」の、その先へと手を伸ばすー限界集落における持続可能性を探る



文責：武田力／写真撮影：辻村耕司

小さな集落に継承されてきた舞い

あなたは民俗芸能と聞くと、どのようなイメージを持ちますか？

「ずっと昔から続いているもの」「変えてはいけないもの」「おじいちゃんたちがやるもの」「山間の村に伝わってきたもの」「プロではない人たちがやるもの」。

ぼく自身、民俗芸能をこのように思っていたし、いまもさほど変わらないイメージもあります。1964年の東京オリンピックを旗頭とするように語られる日本の高度経済成長。それは東京をはじめとする都市だけではなく、山間の集落にも大きな変化をもたらしました。滋賀県高島市に位置する朽木古屋集落もそのひとつです。高度経済成長期を迎え、大きく変化していく日本の社会構造に、林業を中心としてきた朽木古屋での生業は成り立たなくなり、若い人が次々と大阪や京都といった都市へ移住。集落は過疎化、そして高齢化していき、いまは「限界集落」と呼ばれる集落の存続が危ぶまれる時を迎えています。

かつての朽木古屋集落は、海に面する福井の若狭から、都であった京都へと海産物を卸す鯖街道上の要所で、古来から人と文化の結末点であったと聞きます。仕事柄あちこちを移動する行商人など、多様な人たちが行き交うその街道によってもたらされた文化のひとつに、この六斎念仏もあります。お盆に集落へと帰ってくる祖先ら精霊への奉納の舞いとして継がれ、滋賀県の選択無形民俗文化財にも指定されているこの六斎念仏ですが、その過疎化と高齢化が進む中で2012年に一度途絶えてしまいます。そこで、2015年から集落外のアーティストなどが関わりながら、現地の方々とともにその復活・継承へ向けた活動が進められてきました。ぼくもそのときにこの集落に関わり始めたひとりです。不思議なことに、それまでなかなか見向きされず、途絶えてしまった六斎念仏が、アートという文脈を入れることで、色々な人たちが関心を寄せてくれました。その活動は徐々に参加する人たちを増やししながら、いまのところ順調に進んでいます。でも、この変化によって失われたことも当然にあります。そのとき、なにを伝統と呼び、なにを継承していくべきなのでしょう？



8/14の奉納日の朽木古屋集落の様子



Zoomを用いた打ち合わせの様子

「伝統」とはなにか？ 「継承」とはなにか？

2012年まで六斎念仏は集落の人たちだけで続けられてきました。その理由は、朽木古屋という土地に生きた祖先たちが何百年何世代にも及ぶ時間を重ねながら、ここに生きる上で培われてきた様々な知恵をこの六斎念仏に込めてきたからです。その知恵とは、先祖供養の手法としてはもちろんのこと、この土地で林業や農業をする際の身体の使い方や、みんなでこの土地で生活する上での楽しみとして、または協働のあり方など、たくさんのことと繋がっています。そう考えると、民俗芸能は未来へ思いを託すタイムカプセルのようなのかもしれません。その場合の奉納は、この土地この時代を生きる人たちでタイムカプセルを掘り返し、またみんなで埋め戻すような行為です。でも実は、民俗芸能でのタイムカプセルは中身が変化していきます。舞い方を間違えて伝えたり、集落での生業が変わることで、その土地で生きるために必要な身体のあり方が変わったり、なにを楽しみとするか、また協働の仕方も技術の進展や時代の価値観によって様々でしょう。その土地で営まれる日常と繋がっている民俗芸能ですから、それは日本の社会構造が大きく変わったここ数十年の話ではなく、これまでもそうした変化はあったはずで、保守的なイメージの強い民俗芸能ですが、その歴史は革新によって成り立ってきたとも言えるのかもしれない。

過疎高齢化した集落の未来を考えることは、日本の未来を考えること

「伝統は革新」とは言ったものの、当然なんでもアリなわけではなく、これまで培ってきた朽木古屋という土地の歴史と、取り巻かれるいまの状況において、どういう選択肢があり、どれを選ぶのか。その選択の余地がなくなったときに、芸能も集落も絶えるようにも思えます。当地の現状を踏まえると「朽木古屋の出身や在住を前提とせず、この土地の文化をどう共有し、また継承していくためにはどのような仕組みが必要か？」というのが、次の課題になるのかなと思います。六斎念仏だけではなく、たくさんの文化がそれぞれに絡み合いながら成り立っている朽木古屋という集落に対して、来訪者それぞれが抱いた関心に応じて緩やかに集い、その土地の文化を「共有の知恵」として実践を通して学んでいく。そうした関係人口を緩やかに継承に加えていくことは可能なのか？ コロナ禍ではありますが、Zoomなども活用しながらそんな話し合いをみんなと重ねる中で、誰でも集えて、出会えて、学べる「広場」をつくる話が上がっています。それは集落を訪れる人と、朽木古屋やその周辺に住まう方々の／と交流する「広場」。私的であり公的でもある、入会地のような「広場」を構想しています。具体的になにがこの「広場」に必要なかは、集落の方々やこの機会に縁を持たれた方たちと引き続き話をしながら、みんなで考えていければと思っています。

最後に、これから少子高齢化の時代を迎える日本にとって、朽木古屋のような集落は日本の最先端であると思っています。今後、過疎高齢化し消滅する集落は加速度的に増えていくでしょう。でも、長い歴史をもって続いてきた集落には、民俗芸能のようなその土地で生きるための知恵が残されているはずです。それはその集落だけではなく、広く「人間が生きるための指針」となり得ると考えています。その「生きるための指針」は、これから経済的に下っていくであろう日本にとって貴重な財産なのではないでしょうか？

限られた紙幅で「入り口」だけを書きました。もしも興味を持たれた方や意見のある方などは以下のURLからご連絡ください。<http://riki-takeda.com/問い合わせ/>

どのようなかたちにせよ、この機会にあなたとの縁が生まれることを期待しています。